# 透析医のひとりごと

## 「私と透析と太田和夫先生*」

須田昭夫

私は1969年3月，福島県立医科大学を卒業してすぐに医師免許を与えられた．無給医の温床であったインターン制度が廃止されていた．最初の臨床研修は山形市立済生館病院の内科で行った．指導医は同門の腎臓内科医，大沼央先生と土田秀一先生らであった．当時では珍しい腹膜透析を，1年以上続けている患者さんの担当医となった．このときの経験が，私の進路を決める原点になったのかもしれない．当時の腎臓病学は，腎疾患の分類と治療法の探索に腐心していたが，病因論を飛び越えていきなり腎不全の治療に関わったことは，むしろ新鮮であった．

医師としては早速，食欲と意欲に欠ける患者さんに直面したが，子どもの頃から母に料理の手ほどきを受けていた知識が，大いに役立った．私の母は万事控えめな人であったが，こと料理に関しては「主婦はお料理のプロですからね」というような人であった．

1970年4月からは国立東京第一病院（東一，現在の国立国際医療研究センター病院）内科に移った．副院長の河野実先生を始め，内科各科の医長先生方には大変お世話になった．内科の全診療科を3カ月ずつ巡回する研修は美味かつ濃厚，栄養満点であった．ここでもなぜか腹膜透析患者さんの担当医となり，廃液困難と格闘した．血液透析は泌尿器科の広川先生が担当しており，スタンダード・キールを使用していたが，透析膜のセッティングと，ホルマリンの匂いを思い出す．東一の先生方は，研修医の教育にとくべつの熱意をもっておられた．院内すべての科の抄読会やCPCには，研修医が自由に出席できた．私は脳外科，神経内科，循環器内科，消化器内科には，とくにお世話になった．内科研修医が自主的に行う抄読会も，収穫が多かった．聖路加・虎ノ門病院を交えた3病院合同カンファレンスは，ハイレベルであった．じつは私の妻も同期の内科の研修医であったが，同僚はたまたまの同姓だと思っており，私たちも，そう見える様に努めた．2年かけて内科をちょうど一回り終えるころ，東京女子医大が腎臓科の助手を募集していた．当時の東一には腎臓内科がなかったためすぐに応募したところ，心臓外科の重鎮であった榊原仟教授と，血液透析を担当する太田和夫講師の面接を受けた．調査は終えていたらしく，即決で心臓血圧研究所に採用され，昭和47年4月に発足した腎センターの最初の助手になった．榊原教授は廊下ですれ違うと，「太田先生のところに来てくれてありがとう，何か問題はありますか」などと気さくに声をかけて下さった．

東京女子医大腎臓病総合医療センターは，1970年1月，太田先生が女子医大心研に招聘されたことに始

＊ 元東京女子医科大学名誉教授/元日本移植学会理事長/元日本透析医学会理事長

まるが，人工心肺の使用後に発生する腎不全の救命を目指していた．同年3月には，女子医大心研で最初の血液透析が行われたが，血液を体外循環させるために人工心肺に似た感覚があり，心研の手術室で行われたという歴史は感慨深い．

1971年5月に行われた日本初の生体腎移植は，組織適合性にこだわって満を持して行われた結果，長期生着して信頼を得ることにつながり，様々な良い影響を残した．太田先生の長期的視野に立った，堅実な計画であった．

1971年7月，早くも同時透析20床の透析室が心研に併設された．72年に私を助手第1号として採用した太田先生はいきなり，「須田君な，僕はここに内科，外科，小児科，泌尿器科を集めて，腎臓病の総合医療センターを作って，腎臓移植をしたいんだよ．移植をするためには，腎臓病の人や血液透析の患者さんを集めなければならない．よろしく頼むよ」と語られた．「今，私たちは人けのない寒い海岸にいるようなものだ．凍えないためには，まず枯れ枝を拾ってきて火を起こそう．煙を見た人が薪をもって集まってくれば，大きな火になるだろう．あとは運だ」とも語られた．とことん，人間を信用する人であった．透析室は同年12月，人工腎臓センターとして診療科に昇格した．ほぼゼロから始めて3年足らずであった．その後，専属の医師が続々と採用されていった．のちの東間弘教授，杉野信弘教授，阿岸哲三教授，新潟大学高橋公太教授らは，このころに着任された．のちにサイコネフロロジー研究会を立ち上げた春木繁一先生と，はじめてお会いしたのもこの頃である．大学に既存の泌尿器科は，梅津隆子教授を腎センター初代所長にお迎えして合流した．太田先生は既存の泌尿器科に対する礼を尽くし，自分が初代所長となることを嫌った．太田先生はいつもこの調子で，後日，アジア移植学会を立ち上げたときにも，「アジアに育つ学会だから，第1回目をアジア最果ての東京でやってはいけない．アジアの人たちが喜んで集まる所でやろう」と言って，インドネシアの有名な観光地，バリ島で開催した．

透析室には「テクニシャン」と呼ばれる多数の若者が，透析の実務を担当していた．彼らに対して太田先生は，「事故があれば，君たちは無資格者と呼ばれます．しかしすべての責任は私がとります．安心して仕事をして下さい．必ず国家資格をつくるので，それまでは事故がないように気を付けて欲しい」と語っておられた．初代技師長江良和夫氏の，超人的な働きにも感謝したい．

透析関連技術と腎臓移植の研究が進められたが，太田先生は，新しい試みはすべて学会に報告して論文化するように命じていた．成功も失敗も，学会・研究会の知的財産とするべきだという信念であった．

1974年11月，活性炭を用いた血液吸着を肝不全の治療に使用した．1977年6月，血液濾過透析（HDF）を開始．同年7月，血液濾過法による治療（HF）を開始．1979年3月，本館に移転し，同時透析40床となった．4月，太田先生が外科教授に就任．5月，遠心分離法による血漿交換療法（PP）開始．11月，二重ろ過血漿分離交換法（DFPP）開始．同年，学会認定の「透析技術認定士」制度が発足し，1980年3月，待

ちに待った第1回透析技術認定士試験が行われた．5つの学会が認定する資格には，多数の合格者が生まれ，苦節10年が祝福されたが，資格はまだ学会認定であって国家資格ではなかった．1983年4月，太田先生は腎臓病総合医療センター所長となった．

この頃，ある病院の透析室で「無資格者医療問題」が大きな話題となって，太田先生は進んで証言台に立った．「私のところにも，あなた方が無資格者と呼ぶ技士がたくさんいます．その技士を育てたのは私です．その意味で私が罰せられることは構いません．しかし，みなさんは現実を知らなすぎます．あなた方が無資格者と呼ぶ技士が操作する，人工腎臓のおかげで生きている人がいま，日本には7万人もいます．人工腎臓は機械ですが，看護学校では電気工学を教えていません．私は技士を育て，国家資格を作るために努力してきました．しかし国は一向に動きませんでした．法律と現実が合わなくなれば，法律のほうを変えるべきですが，国はそうしなかった．責められるべきは国であります．」

同席した技士たちは泣いていた．太田先生の熱弁は公文書となった．もはや事態を無視できなくなった政府はすぐに動いた．翌1987年，「臨床工学技士法」が制定され，国家資格が作られた．

太田和夫先生は無資格の「透析技師」を採用して育て，関連学会，関連省庁，政治団体などに働きかけて国家資格化に奔走し，5学会認定の「透析技術認定士」制度をつくったが，ここにようやく最終目標に達したことになる．今日の医療の趨勢を見ればこの国家資格化は，ごく自然な流れのようにも見える．

太田名誉教授の奥様は，「臨床工学技士という国家資格を作るために，太田は自分の時間を最もたくさん使っていたように思います」と語っておられる．先見の明と多大な労苦による資格化であった．技士たちとの信義は貫かれた．

資格化交渉を振り返ると，厚労省は「認定されるべき人たちを育成して下さい」「その人たちの能力の基準を作ってください」「まず学会が認定して下さい」「一定の人数に達することが必要です」「資格化には永続性の証明が必要です．公的免許を与えると，取り消すことができませんから．」「教育システムと教科書，試験制度を作って下さい」「有資格者が指導者になる，自律的なシステムが必要です」などと，次々と課題を与えた．

官庁がするべき業務を行わず，責任と実務をすべて太田先生個人に任せ続けたわけである．これらを一つ一つクリアーして，関連する5つの学会の意見をまとめながらテキストを作り，講習会を開き，試験を実施して学会認定の資格をつくり，それを一つの国家資格にまで高めることは，論文の数や学会の地位のような個人の業績としては評価されにくいが，日本の医療に与えた功績は偉大である．

数かずの著書を刊行し，血液透析治療の普及に努めた太田先生の最大の著作は，1974年刊行の「人工腎臓の実際」であるが，「ドラ息子を抱えたように，手がかかる」とおっしゃりながら，しばしば改定を繰り返しておられたのは，人工腎臓普及への思い入れによるものであった．約30年後の2005年，著者に盟友秋

澤忠男，秋葉隆，川西秀樹，斉藤明，佐中孜各先生を加えて改定第5版が刊行された[1]．私は大学を離れて開業したが，暫くたったころ，太田先生から電話があった．「君は放って置くと患者さんのことばかりしている．私が一人で欧州に行くときには一緒に行こう．私と一緒なら，患者さんも許してくれるだろう」と言って下さり，その後は海外での委員会や打ち合わせがあるときに，ご一緒させていただいた．パリのセーヌ河畔を散歩しながら太田先生がベルレーヌの詩を暗唱して，現地の教授が驚いたことや，著名な教授が，パリノートルダム寺院が見える自宅で，下足で歩く床に落とした氷を自分の酒に入れて飲んでしまった事件などが思い出される．いつも涼しい国では，衛生観念が独特らしい，というのが私たちの結論だった．太田先生は往復の機中や空港ではいつも原稿を書いておられ，「こういう時に書いておかないとね．今回は3本書けた」などと言っておられた．

帰国時には「日本はいいね．清潔で，安全で，食べ物がおいしい．そして日本語が通じる」とおっしゃった．どこにいても会話に不自由しない太田先生も，駄洒落が通じる日本が大好きだったのです．前田貞亮先生とお会いになると，とくに喜んでおられた．

私はいま，東京保険医協会会長として，日本の医療，介護，福祉，教育，雇用を改善する活動，その他を行っています．

## 文　献

1） 太田和夫，秋澤忠男，秋葉　隆，他：人工腎臓の実際．東京：南江堂，2005.

須田クリニック/東京医大臨床教授（東京都）